

特集

酒田市大火から

50年。

あの日の記憶を
次の世代へ

酒田のシンボル
大獅子

酒田市大火復興のシンボルとして誕生した大獅子。
毎年、酒田まつりの山車行列で市内を練り歩き、市民に勇気と元気を与えている。



酒田大火 復興50年

50年前、酒田市中心部の商店街や住宅街を次々と焼き尽くした、戦後日本を代表する都市大火。当時を直接知る人は少なくなっていますが、災害の記憶を風化させてはいけません。

災害の教訓を伝え続けることは、未来の命を守ることに繋がります。

「忘れない」「伝え続ける」「備え続ける」

酒田市大火の経験は、今を生きる私たちへの大切なメッセージです。

酒田市大火について
詳しくはこちら▶



「風の町」と言われた酒田

酒田市は、日本海からの強い季節風を受けやすい地理的条件から、歴史を見ても何度も火災に見舞われてきました。18世紀から現在までの間に、500戸以上焼失した火災が16回記録されています。19世紀後半（明治）以降は消防組織の充実や市民の防火意識が向上したこともあり、100戸以上が焼失する火災はほとんどありませんでしたが、1976（昭和51）年、1,700戸余りを焼失する「酒田市大火」が発生しました。



▲消火活動の様子



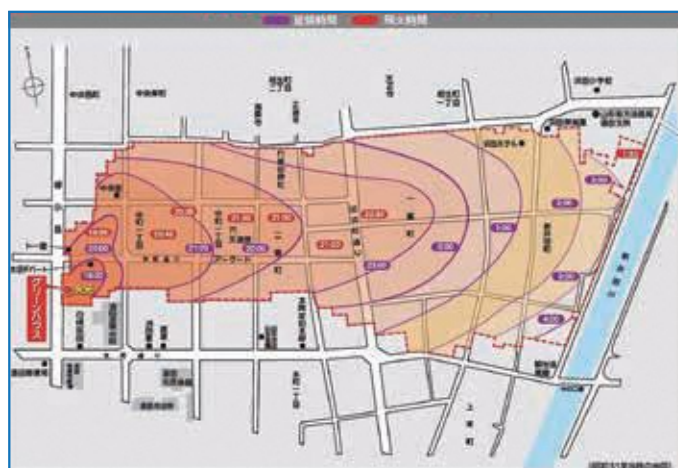
▲上空からの様子

酒田市大火の記録

昭和51年10月29日午後5時40分、中町二丁目にあった映画館グリーンハウスのボイラー室から火の手が上がりました。吹き荒れる強風により発生した大量の飛び火が、風下の商店街や住宅街を次々と襲いました。懸命な消火活動にも関わらず、日付が変わっても火の勢いは衰えませんでした。翌30日午前4時ごろに強風が収まってきたことで、ようやく火の勢いも衰え始めました。その後、午前5時に鎮火が宣言されました。

●酒田市大火の被災概要

項目		被害
焼失区域面積		22.5ha
人的被害	死者数	1人
	重傷者数	10人
	軽傷者数	993人
建物被害	全焼	1,767棟
	半焼	7棟
罹災世帯数		1,023世帯
罹災者数		3,300人
被害総額		405億円



▲酒田市大火焼失区域図

50年前、あの日の記憶を語り継ぐ

50年前に発生し、酒田市の中心市街地を焼き尽くす大きな災害となった酒田市大火。消防士として当時消火活動に当たったお二人にお話を伺いました。あの日現場で何が起きていたのか。何を感じ、何を考え、どのように火災と向き合ったのか。そして、その経験を今の酒田市と次の世代にどう伝えていくのか。50年前の記憶から、これからの酒田の防火・防災の姿をひもときます。



Q 火災が発生したことをどこで知って、最初にどんなことを感じましたか。

土井 当時は酒田駅前にいましたが、臭いと音で火災が起きているとわかりました。それと同時に、風が強かったのもうなるんだらうという危機感もありました。当時は携帯電話もありませんから、駅前の公衆電話から本署に電話し、指示を受けて現場に向かったら、消防車両のサイレンが360度から聞こえるような状況であり、目の前が火の粉で赤く染まったように感じました。

池田 私は発生当時は自宅にいましたが、友人から「大変な火事が起きている」と聞き、自宅から消防署に向かいました。国道7号を通過した辺りで空が真っ赤になると同時に、火災の煙が私のほうにどんどん来るのがわかりました。当時はものすごく強い風が吹いていて、立っているのがやっと、という状況でした。

Q 怖いと思う瞬間はありましたか。

土井 実は私は、それまで建物が全焼するような現場に出動したことがありませんでした。初めての経験でしたが、若さもあってか、怖さよりも負けたくないという気持ちで向かっていました。東北電力の職員が強風の中、中町モールの電柱に登って、避難する人たちのために街灯の明かりを消すまいと頑張っていたのをまざまざと見せられて、私も苦しかったけど奮起しました。

池田 当然怖かっただろうと思いますが、その怖さは今ちよつと思いません。怖さというよりも、いくら放水しても消すことができない、どんどん広がって延焼する火災への諦めの気持ち、その印象が強いです。

Q 火災現場で起きた印象的な出来事がありますか。

土井 私は先輩職員と一緒に、前線で消火活動をしていました。現場では消防署員に加え、約1,700人強の消防団員も出動し、大変頼もしく感じました。延焼拡大の原因になっていた飛び火を食い止めるため、新井田川で消防ポンプ約70台による一斉放水で水の



今回インタビューにご協力いただいた方



元酒田地区広域行政組合
消防本部消防長

土井 寿信さん

(大火当時20歳、昭和31年生)

酒田市大火発生時は採用2年目の消防士。八幡出張所(当時)に勤務しており、当日は休暇中だった。



元酒田地区広域行政組合
消防本部消防署
消防第一課長

池田 昭年さん

(大火当時19歳、昭和31年生)

酒田市大火発生時は土井さんと同じ採用2年目。千石町(当時)の消防本部に勤務しており、当日は非番だった。

カーテンを作れたのは、消防団のおかげだと思っています。

池田 当時の消防隊員って、長靴にカッパズボンと防火衣、手は軍手といった感じの装備でした。なので当日はとても寒く、放水している我々も手が凍えて、でもそれ以上に熱風・炎があつてという、ちよつと耐えられないような感じでした。

土井 消火活動や避難活動のために明かりをともし続けた電力会社、二次災害を回避するため作業に当たったガス会社、情報収集にあたったアマチュア無線の有志、パトカーで入院患者を避難させた警察官、さらに発災後駆け付けた自衛隊など、大火当時、被害を最小限に抑えるため、自分にできることを全力でやり遂げた多くの関係機関の活躍があつたことを忘れてはなりません。

Q 50年を迎える今、酒田市大火を知らない若い世代に伝えたいことはありますか。

土井 私は、酒田市大火を自然災害だと思っています。酒田市大火はなぜ起きたか。あの日の風がなかったら、映画館だけの火災で済んだはずです。酒田は風が強い町だということ、風に対する防御を忘れないでほしいです。これは火災だけでなく台風の時にも、そういう風を受ける町だということ。それなのに、今は風を防ぐ松林が松くい虫のために全滅しつつあるという状況を知ってほしいです。

想像できない災害が起きたときに大切なことは、隣近所同士の付き合いです。今は酒田市大火が発生したときよりも、地域のつながりがなくなっている状況で、そんな中で地震や洪水などの

災害が起きたらどうでしょうか。酒田市大火では、みんなの協力で命を守ったということもぜひ知ってほしいです。

池田 これまでは想定外の災害が起きて被害が大きくなる傾向があつたと思いますが、風が強いことも地震のことも、人が少ないことも含めて、想定しておく。想定内にしてしまえば対応できると思えます。酒田の気象条件は大火が起きやすく、大火の要因になる箇所が今でもあります。公的機関に頼ることなく、自治会を中心とした横の連携、つまり共助が一人の犠牲者も出さない結果につながるのと、それがとても大事なんだと思います。



50年前の記憶を辿る、2人の大火経験者



自営業
大泉 公三さん
(大火当時29歳
昭和22年生)

強風の中、私は生後11か月の娘を背負い、私の母は4歳の息子の手を引き、近所で一番頑丈な建物だった山形新聞社(現クイーンダンス)の建物に避難しました。この時

目にしたのは、頭から水をかぶって、カメラを片手に飛び交う火の中へ向かう何人もの記者の姿でした。あまりにも衝撃的で今でもはっきりと覚えています。その後、火の勢いがさらに強まり、親族が住む高砂へと避難し、家族全員がそこで合流しました。

まさか自分の家が焼けるとは思っていませんでした。避難時に「必ず家に戻る」と思っていたので、持ち出したのは娘の哺乳瓶とおむつだけ。翌日、焼け野原となった家々を目にして、初めて現実を実感しました。目の前に広がっていたのは、すべてが焼け落ちた跡で、

着るものも、食べるものも、商売の道具もない。それでも親族や友人、地域の支え、救援物資、そして何よりお客さんからの注文がありがたかったです。電話もなくて、メモ用紙を渡されたりしながら注文を受けて、在庫ゼロの状況から生活と商売の再建に奔走しました。一からのスタートでした。

大火から50年を経た今、次の世代に伝えたいのは「自分のところは大丈夫と思わないこと。そして、避難したら安全が確認されるまで決して戻らない」ということです。災害は必ず自分にも起こることを考え、日頃から備えてほしいです。あの日の経験は、私にとって忘れてはならない大切な教訓です。



▲酒田市大火前の店舗(中町一丁目)
左/昭和25年~30年ごろ
右/昭和40年ごろ

「早く、正確に伝える」 若き広報担当の使命

元市職員 高橋 清貴さん

(大火当時24歳、昭和27年生)

私は大火当時、市役所入庁2年目で広報を担当していました。消防により鎮圧・鎮火が進む中、30日の早朝から広報車で被災地を巡回し、被災状況の記録撮影に奔走しました。「被災された方に、早く正確な情報を届けることが何より大事」と、11月1日から災害速報を発行しました(10月31日は新聞に掲載)。各課から情報を集め、原稿をまとめ、新聞折り込みで毎日市民に届けました。今でこそインターネットの時代ですが、50年前は新聞が最も情報が行き渡る手段でした。年が明けると「被災した人たちに、一日も早く復興への道を歩んでほしい」という思いを込めて「復興速報」に名称を変え、復興への歩みを伝え続けました。

当時は疲れを超越するほどの使命感がありました。酒田市大火発生から50年を迎えた今、自身も編集に関わった大火の記録冊子をぜひ今の若い方にも読んでほしい、50年の重みをしっかり受け止めてほしいと願っています。



▲広報さかた災害速報

皆さんのご意見をお寄せください
【公開期間】10月20日(火)まで



酒田市大火50年事業

日時／10月25日(日)
午前9時30分～午後0時30分

式典

酒田市大火当時を振り返る映像上映や講話、復興の歌「明日に生きる酒田」の市民合唱、消防音楽隊の演奏、防火の誓いなどをを行います。

時間／午前9時30分～11時40分 場所／希望ホール

対象／どなたでも(手話通訳あり)



一斉放水

無火災を祈願し、消防団員が一斉放水を行います。

時間／午前11時55分～正午 場所／希望ホール南駐車場前(新井田川沿い)

防火パレード

無火災を祈願し、消防車両20台でパレードを行います。

時間／正午～午後0時10分(以降巡回広報)

場所／臨港道路新井田川線～本町二丁目、中町二丁目他



酒田の安全・安心のためにはたらく車展

市民の安全・安心のために活躍している車両の展示を行います。

時間／午前10時45分～11時55分 場所／高坂整骨院(本町一丁目)前

交通規制のお知らせ

臨港道路新井田川線が午前10時～午後1時まで車両通行止めとなります。



名称	日時	場所	内容など
消防団特別巡回広報	10月28日(水)～30日(金)	市内全域	酒田市大火の記憶を風化させず、防火意識の向上を図るため、市内全域を消防団車両で巡回広報します
防災行政無線サイレン吹鳴	10月29日(木) 午後5時40分～	市内各地	酒田市大火当日の発生時刻に合わせて、市内一斉にサイレン(屋外スピーカー)を鳴らします
市民講座(市共催事業)	10月31日(土) 午後1時30分～3時30分	公益研修センター	基調講演(清水建設(株)技術研究所 野竹宏彰氏)やパネルディスカッションなど(申し込み不要。参加費無料)

大火当時もあった住民の「共助」

酒田市大火の日の夜、隣近所の声掛けや助け合いはもちろん、被災した知人や親戚の身を案じて被災地に駆け付けた人など、住民同士の助け合い「共助」がありました。全国各地で大規模な災害が頻発する今、少子高齢化や価値観の変化などによる地域コミュニティの希薄化が「共助」の力を弱める要因となっています。

大火から学び「共助」の重要性を見つめ直し、一人一人ができることを考えていきたいと思います。

これからの50年

酒田市大火から半世紀が経ち、大火から異例の早さで復興した本市の中心市街地においても、郊外への大型商業施設の出店や自家用車保有の拡大による利用者の減少など、商業・経済の中心地としてのかつてのにぎわいが失われつつあります。

市では、再び中心市街地である中町エリアを多くの人が行き交い、憩い、暮らすまちとしての再生を目指し「酒田市まちなかランドデザイン」を今年3月に策定しました。中町エリアが再び本市の中心として大きく前に飛躍することを願ってやみません。

酒田市大火から50年。私たちは、あの日の記憶と復興の歩みから多くを学びました。その教訓を次世代へつなぎ、一人一人が災害に備え、地域で支え合う。これからの50年も、安心・安全なまちをみんなで築いていきましょう。